

「滅びによって得る安息」

歴代志下 第36章 17節～21節  
エペソ人への手紙 第5章 6節～13節

説教 本庄 侑子 伝道師

今日お読みしている歴代志は、イスラエルがバビロン捕囚を終えてエルサレムに帰還し、神殿をもう一度建て直す中で、これまでの歴史を振り返るようにして記されました。その最後はバビロン捕囚の記録です。歴代志と並行してバビロン捕囚を記録する書物に列王記があります。

列王記が記されたのは、バビロン捕囚のまっただ中においてだったと言われています。その最後は、神の民の終わりを示すような記述です。彼らは、安易な希望を徹底的に打ち砕かなくてはなりません。捕囚の最中、偽預言者たちが現れていたからです。これは裁きではない。神は私たちと共にいてくださる。そう語り、人人を安心させ、目先の活動へと駆り立てました。列王記は、そんな安易な希望を打ち砕き、捕囚を神の裁きとして受け入れた書物なのです。

対して歴代志は、不思議な言葉で同じ時代を振り返ります。「こうして国はついにその安息をうけた。すなわちこれは、その荒れている間、安息して、ついに七十年が満ちた。」(歴代志下36章21節後半)偽預言者のような安易な希望を語っているのではありません。彼らはイスラエルがいかに神に反逆してきたかもはっきりと記します。しかしその上でなお、捕囚という滅びの時、実は安息をこそ受けていたと締めくくります。

安息は、神の祝福を受け、聖別される特別な時です。神から『あなたは私のものだ。私はあなたに対して責任を持ち、愛し、守り、支え続ける。』そう宣言していただきます。安息は、ただ体を休めることによって得られるものではありません。全ての手の業から離れて神を礼拝することによって与えられるのです。

神は、民たちに安息日や安息年を守るようにとお命じになりました。私たちがあつという間に神なしで生きようとし、自分たちがこの世界を動かしていると思い、休むことなく働き続けては互いに争い合い、世界を滅茶苦茶にしてしまう罪を抱えているからです。神はそんな私たちが、神のものとして安息を得て、共に生きることができるようになりました。

しかし、民たちは神に背き続けました。そして起ったバビロン捕囚。それは確かにイスラエルへの裁きであり、神によってもたらされた強

制終了でした。民たちは、あらゆるものを失い、苦渋を味わい尽くしました。しかし、歴代志を記した人々は、なお与えられた再出発の時を痛感したのです。滅びの時こそ、神が私たちを神のものとして取り戻してくださった安息の時だった。今、私たちが神殿を再建し、礼拝生活を再開しようとしているのは、滅びによって安息を得たからだ、と。

イエス・キリストの光は、私たちのやみ、罪を明るみに出します。それは、安易な偽預言者の声をかき消す厳しい光です。バビロン捕囚にあうような激しい痛みが伴います。しかし、明らかにされた罪はただの痛み、滅びでは終わりません。「明らかにされたものは皆、光となるのである。」(14節)光となるため、まことの安息へと解き放ち、再出発させるための痛みです。イエス・キリストはそのために来られたのです。

歴代志が記されて以来、礼拝が命を取り戻しました。滅びによる安息を得て再出発が与えられた人々の歓喜の声、もう一度与えられたこの日々を新しく歩み直したいという切なる祈りが響き始めました。

イエス・キリストが来られて以来、礼拝はイエス・キリストの十字架がそばえ立つ場所になりました。御言葉を通して罪が明るみに出され、その罪を赦すために十字架につけられたイエス・キリストの恵みを、この耳で、この手と口で味わい知る場所となりました。そして、与えられる再出発への驚き、感謝、献身の思いが沸き上がる場所となりました。私たちは主の日ごとに、かつて歴代志を記した人々も立たされた特別な時へと解き放たれます。イエス・キリストの恵みをより一層知らされた者として、ただ神によって再出発させられます。

列王記の最後に記されるエホヤキン王は、マタイによる福音書冒頭の系図に名を連ねます。滅びはありました。しかし、滅びによって得た安息があり、救いの歴史が進んだのです。私たちも同じ歴史の中に招かれました。永遠の滅びを呑み込んで進む神の愛が、罪深い私たちを貫き、世界の歴史を永遠に支えています。今朝も私たちはその歴史の中で罪赦され、まことの安息を得て、再出発の時を与えられるのです。

(記 本庄侑子)